ワンポイント・アドバイス

ここからのページは、今まで行ってきた課題解決支援講座から
共通するキーワードを抽出し、そこから見えてきたことを紹介します。

ワンポイント・アドバイスとは

ワンポイント・アドバイスは、10年間にわたる取り組みの中から、共通項としてみえてきたことを順番に挙げてみました。確かな根拠に基づいてというよりも、10年間にわたって取り組んできた経験を整理してみると、こんな点が重要だったのではないか、という経験則から導き出されています。

公民館には、マニュアルがありません。なぜかというと、公民館活動はそれぞれの地域の伝統や文化に規定されて活動が生み出されているので、学校のように全国共通した学習指導要領を作ることが難しいのです。仮に作ったとしても、うまくいかないでしょう。学習内容や方法、形態など、それぞれの公民館で生み出していくしかありません。

ところが、問題もあります。「地域課題解決支援講座をそれぞれの公民館でやって下さい」と言われたとき、皆さんは何を頼りにされるでしょうか。市町の教育委員会ですか、それとも公民館の前年度の取り組みでしょうか。おそらくどちらもですね。ですが、市町村合併後、市町教育委員会はとても忙しく、また経験をもった職員が減り相談体制が弱くなってきました。前年度の事業を参考にしようと思っても、地域課題解決支援講座は初めての取り組みなので、どうしたらいいか見当がつきません。

これではやろうと思っても、なかなか手が付けにくいということになってしまいます。地域課題は山積みです。山積みだけど、できないのもしょうがない、と考える教育委員会や公民館もあるでしょう。しかし地域には人が住み続けています。背を向けていられない現実も一方であります。

そんなときに、本に掲載した事例とワンポイント・アドバイスを参考にしてほしいのです。ここに掲載した事例は、県内のどこにでもあるような公民館の事例です。協働したアバンセのスタッフもどこにでもいるような職員たちです。掲載した事例は、どこの公民館でも、少しの工夫と努力でできるものばかりです。だから心強いのです。地域課題と向き合うときに、背中を押してくれます。

どこの市町教育委員会でも公民館でも、意欲さえあれば誰でも取り組むことができる。地域で暮らす人たちと一緒になって人の幸せと暮らしやすい地域をつくっていく。地域づくりはたしかに難しいけれど、課題解決支援講座は想いがあればできる。そのとき、この点だけは大切にしてほしい、という想いをこめたワンポイント・アドバイスです。

6つの抽出された項目

経験則から抽出された項目は、6つありました。

❶【交流づくり】
一番大事なことは、コミュニケーションが取りやすい場を作ること。

❷【調査】
調査は難しい。でも協働することで実現し、課題発見に活かすことができる。

❸【まちあるき】
ただ歩くだけではない。目的をもってまちを歩くと、思わぬ気づきや発見がある。

❹【祭り・イベント】
祭り・イベントの存在の意味って、考えたことがある!?

❺【防災】
防災はまちづくりには不可欠。だからこそみんなで考え行動できる課題。

❻【子ども・学校連携】
子どもの存在を意識することで、地域の未来の芽がふくらむ。

これらの6つは、31のケースの中から抽出したものです。振り返ってみると、どこの地域、どこの公民館でも「交流」を大切にされています。かつてやられていた住民間の「交流」を再生させることができるように工夫しようという試みが随所にみられます。「交流なくして講座なし」という表現は、講座そのものが、交流を促進する役割を果たしているという意味あいも込められています。

次は、「調査」と「まちあるき」です。これは地域を知る活動です。意外と知っていそうで知らないのが、地域です。長く住んでいるからといって自然と地域のことがわかる、というわけではありません。知らないお店ができたり、新しいアパートが建っていたり、住む人も変わってきています。住んでいる人の気持ちがわかるような「調査」は、講座を実施するときの重要なアイテムです。定期的に取り組んでみるのも一考です。

「まちあるき」は、自分たちの住んでいる地域がどんなところだろうという、参加者による探索活動です。「まちあるき」は、どんなテーマであってもやってみたい、という気持ちになります。参加者の皆さんは、地域のことを知りたいのです。最近は歩くだけではなく、カメラやスマホ、タブレット、ドローンなどの新しいツールを活用して歩いたり、探索したりすることができます。

「祭り・イベント」や「防災」は、いろいろあるテーマの一つです。ですが、地域の文化や、住民の暮らし・安全全般に関わるテーマです。とくに近年、九州では水害が毎年のように起こり、命を守る講座になっています。多くの関係機関と協力できる分野でもあります。

「子ども・学校連携」は、地域では子どもの存在は重要です。子どもは未来の地域の担い手なのです。ですが、意外と抜け落ちがちです。地域や公民館は、どれだけ子どもたちの声を聴いているのでしょうか。また公民館と学校との連携関係を知る指標にもなります。

CATEGORY 01

交流づくり

交流で一番大事なことは、コミュニケーションが取りやすい場を作ること。

交流なくして、講座なし

交流は講座にとって不可欠なものです。交流は、もっともプログラムの中で気にかけなければいけないところです。今まで開催した31ヵ所全講座では、プログラムの中になんらかのカタチで交流をはかっています。講座の企画を立てるときに、講師ばかりに目がいき誰にお願いしようかとあれこれ頭を悩ませますが、その前にどうしたら住民同士が気軽に交流できるかを考えることはとても重要です。人が集まれば自然と交流が生まれるというのは大間違いなのです。

緊張感を和らげる交流とは…

最初は、座学中心でワークショップのみで交流をはかろうと試みました。ワークショップは、初めての人同士もグループに分かれ意見出しをするので、緊張感を取り除くためにアイスブレイク（場を和ませるクイズやゲーム等）を取り入れたところ、みんながいきいきとし、ワークショップで交流する楽しみを講座に見つけて来られる（春日）ようにもなりました。このように、職員も交流を促すスキルを身につけ、普段からコミュニケーションをはかれる場をつくることは大事なことです。

交流はバリエーションが豊富、距離も縮む

2013（H25）年度頃から、もっと気軽に交流をしてほしいとの考えから、カフェコーナーを設置し、休憩時間にお茶を飲みながら交流を始めました。参加者のみなさんがホッとされるのか、講座の中では出なかった本音トークが飛びすこともありました。その後、まちあるきやイベントの中で、食生活改善推進員や男性の料理教室等の協力を得て、ぜんざいや豚汁、カレー等を食べながらの交流が広がりました。一緒に行動したあとは話も弾み、人と人の間の距離がぐっと縮みます。講座終了後に継続のひとつの方法として、お菓子とお茶を用意してのお茶ご会（循誘）を開催したところもありました。

ここがポイント

❶ 講座の中で一番大事な交流。
❷ 交流を生むスキルを身につける。
❸ 講座のプログラムに交流を組み入れる。
❹ 交流から始まる風通しのいい地域づくり。

プログラムの中に交流を組み入れる

場を和ませ盛り上げる手法のひとつとして、講座のプログラムの中に食べものを介するという企画があります。一品持ち寄りの「Bar洋子」を参考にした「桜岡deブランチ」（桜岡）や持ち寄りパーティーのポットラック（東山代）です。初めて同士でも、食べ物があると「美味しい！これどうやって作るんですか？」と自然に会話が弾み、わいわい盛り上がります。その勢いのままワークショップをすると、おしゃべりの延長みたいな感じで、アイデアがどんどん溢れ出してきます。プログラムの中に交流を組み込むこともひとつの手です。

交流から課題解決の力が生まれる

講座の中での交流がうまくいくと、その後も地域の中で会話が生まれ、つながりができてきます。地域の中につながりができると、いろんなところで連携がしやすくなります。また、課題解決につながるアイデアも、いろんな人の意見が混ざり合うことで、解決方法もひとつだけではなく、複数生まれてくることもあります。地域活動をする上では、参画者が多ければ多いほど活動が活発化し、地域も活性化していくので、交流がもたらす力が課題解決の力と言っても、言い過ぎではありません。だからこそ、交流を重要視したプログラムづくりが大事と言えるのです。

CATEGORY 02

調査

調査は難しい。
協働でやるからこそ、実現できる。

調査活動をすることが課題発見につながる

課題を見つける方法のひとつとして、調査があげられます。調査は地域の声を拾って課題の発見につなげる有効な方法です。調査を実施する地域は、公民館や自治会が地域のニーズをつかみづらくなっているところが多いようです。高齢化の課題を地域全体で考えたい（勧興）、新しい住民が急速に増え、これからの地域活動のあり方を探りたい（江北）、みんなの声を活かした地域の未来像を作り上げたい（大良）というように、調査活動をすることで、まずは住民の気持ちを知ることから始めていきます。

講座の中で調査の意義や方法を学ぶ

「講座で調査をやりたい」と聞いたとき、講座の中でどうしたらできるのでしょうか。まずは、調査について学ぶプログラムが必要です。最初に調査の意義を学ぶことから始め、みんなで思いをひとつにします。次に、住民に聞き取り調査をするときに大事なロールプレイの演習、住民が調査でどんなことが聞きたいか意見出しをするワークショップ等を行います。出された意見を基に調査票を作成し、講座と講座の間に調査を実行します。調査の分析には専門家の力も必要です。その後、分析した結果をみんなで共有し、地域の課題は何かを探っていきます。

次世代の参加を考えることも大切

調査は、回数を重ねるごとに住民自身がまちの課題を検討し、その結果から課題解決へ向けた方策を考える一連の学びのストーリーができます。自分たちで課題解決ができる道筋がわかるといろんな課題に対応でき、継続が期待できます。大良では、小学校と連携し「子ども調査員」として、子どもが大人へ地域について聞き取り調査を行いました。自分が住んでいる地域を知ることは、子どもにとっても地域社会の一員であることの自覚を促し、郷土愛を育む機会となります。また大人も、子どもの気づきや発見にモチベーションが上がり、やる気が引き出されます。これが地域の未来を真剣に考えるきっかけとなります。

調査はその後の展開も重要

調査を実施するには住民の協力なしにはできません。調査票を配布したり集めるのに、地区の役員にお願いすることも多々あります。それには日頃からの関係性も大事です。また、調査内容の検討からデータの集計・分析までには約半年ほどかかります。その間、住民にいかにこの調査に参画してもらうかが重要です。自分たちが作った調査である意識が高くなり、その後の展開も自分ごととして捉えることができます。調査することだけが目的ではなく、調査で課題を発見したことを住民みんなで共有し、どう取り組んでいくかをしっかりと考えることが大切です。時間はかかりますが、それが地域の財産となります。

ここがポイント

1. 住民の声が反映され、課題を発見しやすい。
2. みんなでやるのが大事。専門家の力を借りることも大切。
3. 子どもが参加することで、大人のやる気を引き出す。
4. 住民が関わった調査は地域の財産となる。

調査を実行したところ

年度	公民館等名	市町名	テーマ	
2012（H24）年度	勧興公民館	佐賀市	高齢者の暮らしを考える	P11へ 事例 01
2017（H29）年度	上分区	江北町	上分区意識調査　発掘！あるある上分区	
2020（R2）年度	大良公民館	唐津市	大良しあわせプロジェクト	P29へ 事例 10

CATEGORY 03

まちあるき

ただ歩くだけではない。目的を持って まちを歩くと、思わぬ気づきや発見がある。

地域を知り交流が生まれる

まちあるきのいいところは、地域のことを知るきっかけとなり、課題の再発見につながりやすいことです。地域を歩くことで、人と人の距離感が縮まり、知らず知らずのうちにおしゃべりをし、知らない人同士でも交流が生まれやすいです。知らないことを知っている人から話を聞いて、気になるところの写真を撮ったり、メモをすることで、そのあとのマップ作り（まちの魅力マップ、お宝マップ、ウォーキングマップ、防災マップ等）や、公民館に掲示する壁新聞づくり（まちあるきで気づき・再発見したことを書き出したもの等）にも活かされ、プログラムの幅が広がります。

進化するまちあるき

まちあるきは地域を点検することから始まります。ただまちを歩くだけでなく、課題に合わせていろいろなプログラムを展開することができます。各地域での取り組みも、地域の良さを発見（開成）、安全・安心なまちづくり（春日北）、まちの物語を紡ぐ（基山）、健康づくり（中川副）、次世代へ引き継ぐきっかけ（富士、能古見）、まちの危険な場所や避難経路の確認（防災のまちあるき）などがあります。最初は、地域の良いところ探しから始まったものが、年月を重ねていくうちに、地域を次世代へ引き継ぐ手法のひとつとしても、有効であることがわかってきました。

でも落とし穴もある

ただし、気をつけて欲しいことがあります。まちを歩いて成果物（マップや壁新聞等）を作りあげると、そこで達成感や終了感が生まれ、次の展開へとなかなか進まない傾向に陥ります。課題解決支援講座は、成果物を作ることが目的ではなく、住民自らが地域の課題に気づき、その解決方法を学ぶ場なのです。目的を見失わず、まちあるきをすることで何が得られるのか考えて、プログラムを作成します。そして、そこから気づき・発見したものを今後、どう地域に活かしていくのか継続方法を考えることが一番大事です。成果物はあくまで副産物であることをお忘れなく。

ここがポイント

❶ まちあるきは、地域の課題を見つけやすいツールである。
❷ 地域の特色を活かしたプログラム展開ができる。
❸ 気づきや発見が課題を解決するきっかけとなる。
❹ 次の展開も考えておくと、落とし穴にはまらない。

まちあるきを実行したところ

年度	公民館等名	市町名	テーマ	
2013（H25）年度	開成公民館	佐賀市	地元を知ろう　I ♥（アイラブ）開成	
2014（H26）年度	春日北コミュニティセンター	佐賀市	今こそ、その時！みんなで考えよう　安心して暮らせるまち春日北	
2015（H27）年度	富士生涯学習センター	佐賀市	ふじくらしのススメ	
2015（H27）年度	第3区自治会	基山町	まちを歩いて笑顔（しあわせ）探し	P17へ 事例 04
2016（H28）年度	中川副公民館	佐賀市	元気で長生き大作戦！in中川副	P19へ 事例 05
2019（R元）年度	能古見公民館	鹿島市	のごみ★お宝再発見プロジェクト	P25へ 事例 08

防災でまちあるきを実行したところ

年度	公民館等名	市町名	テーマ	
2012（H24）年度	兵庫公民館	佐賀市	兵庫町「地域防災」講座	
2013（H25）年度	鍋島公民館	佐賀市	やられる前の防災学	
2014（H26）年度	神野公民館	佐賀市	防災アクションことはじめ	
2014（H26）年度	橘公民館	武雄市	たちばな防災講座	P15へ 事例 03
2015（H27）年度	南多久公民館	多久市	南多久地域防災力アップ講座	
2016（H28）年度	東脊振公民館	吉野ヶ里町	「防災」話していますか？もしもの時のこと	
2016（H28）年度	成和公民館	唐津市	唐ワンGO！で成和でGO！成和の防災！あそぼ~さい！	

CATEGORY 04

祭り・イベント

祭り・イベントの存在の意味って、考えたことがある!?

つぶやきから地域課題を見つける

何気ない会話のつぶやきの中に地域の課題が潜んでいることがあります。「祭りがなくなった」（東唐津）、「まちに親子が遊んだり集う場所がない」（2018年当時）（有田）「地域のみんながひとつになる仕掛けが欲しい」（鳥栖、西川副）、「祭りを見直したい」（武内）という、職員のつぶやきから課題を抽出し、自分たちに何ができるかを考えていきます。公民館やセンターを拠点とする新しい祭りやイベントを開催するまでの企画や運営の仕方の学びがこの講座から生まれました。

なんのためにするの？

祭りやイベントがなくなって初めて「なんか寂しいね」「みんで集まることがなくなったね」という言葉を耳にしたことはありませんか？たくさんの住民が集まって一緒に計画から準備、実行をするものは他には見当たりません。でも「時間を取られる」とか「関わる人の負担が大きい」とか疲弊感もよく耳にします。そのために課題解決支援講座では「なんのために祭り・イベントをするのか」そこから学びを重ねていきます。いろんな多世代の人の考えや意見を聞いて一緒に課題を考えることは、チーム感が生まれ案外楽しいものです。地域にも知り合いが増え、次の講座が待ち遠しくなります。

企画から実現への成功体験が継続へ

ひとりで祭り・イベントを創り出すということは至難の業ですが、みんなで「祭り・イベントで何ができるか？」と考えると、時間が足らないくらい意見があふれ出します。そこにはその地域らしいアイデアのかけらがいくつも生まれます。次にそのアイデアのかけらをどうしたら実現できるか、知恵を絞ります。講座では、祭り・イベントの企画の立て方、連携の仕方、実施までの準備等を経験することと、当日の参加者の喜ぶ笑顔を見ることで、何ものにも代えがたい成功体験となり、次の展開へと事業が進めやすくなります。

コロナ禍でもピンチをチャンスに変える

2020（R2）年度はコロナ禍の中での講座開催でした。武内では課題解決のきっかけとなるような祭りの企画の作り方をワークショップで何回も重ねてじっくり学び、その後、武内町すみよいまちをつくる会の「おまつり部会」へと引き継がれました。西川副では公民館を舞台に、西川副を音楽発信のまちとして、みんながひとつになるような手づくりの音楽祭を開催する予定でしたが、コロナ禍でオンラインコンサートとなりました。ピンチが新しい手法を生む展開となり、公民館からこの講座をYouTube配信し、参加していない人にも見てもらいました。

ここがポイント

❶ 何気ないつぶやきを見逃さない。

❷ 講座の中で、課題の意義と解決方法を学ぶ。

❸ わくわく感や充実感は講座の中から生まれる。

❹ ピンチはアイデアを生むチャンス。

祭り・イベントを実行したところ

年度	公民館等名	市町名	テーマ
2017（H29）年度	東唐津公民館	唐津市	東唐津あかりプロジェクト
2018（H30）年度	有田町公民館	有田町	遊びの楽校（がっこう）inありた
2019（R元）年度	鳥栖まちづくり推進センター	鳥栖市	みんなでつくる「とすまちもちまつり」
2020（R2）年度	西川副公民館	佐賀市	西川副を音楽でつなごう
2020（R2）年度	武内公民館（企画のみ）	武雄市	あなたが行きたい祭りをつくろう

P23へ 事例 07

P27へ 事例 09

CATEGORY 05

防災

防災は、まちづくりには不可欠。だからこそ、みんなで考え行動できる課題。

防災は身近なテーマで課題になりやすいが…

安全・安心な地域づくりを考えるとき、身近な課題として防災があげられます。課題解決支援講座を始めた頃は、行政から自主防災組織づくりの要請があった時代（兵庫、鍋島、神野）でした。水害常習地区（橘）や土砂災害地区（南多久、東脊振）は、災害に対して危機感を強く持っていました。また、災害に備えて自主防災組織でまちを再点検したり（成和）、自主防災組織自体の再編成とスキルアップをはかりたい地区（古枝）もありました。近年、佐賀県でも水害の被災が続き、危機感をもち課題と捉えている地域も多いので、住民が参加しやすいプログラムづくりを考えましょう。

まち点検とシミュレーションで防災を考える

防災の主な手法はまちあるきや点検で、地図を見ながら避難通路の確認や危険箇所等を地図に落とし込み、自分たちの防災マップを作成します。そこに避難体験をシミュレーションする機会として、HUG（避難所運営ゲーム）（鍋島）やDIG（災害図上訓練）（神野）、クロスロード（YES,NOの判断ゲーム）（東脊振）、サバイバル体験（古枝）を組み合わせたりします。近年は、豪雨被害等から地域での避難のタイミングを探る、マイタイムラインを作成（古枝）し、災害は誰でも命にかかわる危険性があることを認識し、地域で何ができるかを話し合う取り組みへと変化してきています。

連携で幅広いプログラムづくり

国土交通省の河川事務所や各市町の防災担当課、防災グッズを専門に扱っている企業等と連携することで、講座のプログラムの幅が広がります。より実践的に行ったり、必要な防災グッズの知識や使い方の体験等ができます。また、防災に子どもの視点を入れた取り組み（成和）では、大人の視点では気づかない通学路での危険な場所等がピックアップされました。その後、地域のおまつりで子どもの発表会も行われたことによって、住民にも共有できるようになりました。

全住民が参加しやすい方法を考える

防災を課題にした取り組みは、自治会や住民を巻き込み（参加を促し）やすく、地域全体で動きやすいですが、動員を掛けるとどうしてもやらされ感が出てきてしまいます。プログラムに危機感だけを取り入れるのではなく、ちょっと面白くて役に立つものを絡めたり、働いている子育て世代も親子参加できるような楽しいプログラムの工夫とその後も継続できる展開を考えましょう。また日頃から公民館やセンターは、お互いの顔がわかるような住民間のコミュニケーションづくりに努めることも大事です。

ここがポイント

❶ 身近な課題だからこそ、いかに住民の参加を促すかが大事。

❷ 地域の再確認や防災の体験学習を講座の中で学ぶ。

❸ 防災機関や団体と連携することで、プログラムの幅が広がる。

❹ 組織を作るだけではなく、継続できる仕組みを考える。

防災を実行したところ

年度	公民館等名	市町名	テーマ
2012（H24）年度	兵庫公民館	佐賀市	兵庫町「地域防災」講座
2013（H25）年度	鍋島公民館	佐賀市	やられる前の防災学
2014（H26）年度	神野公民館	佐賀市	防災アクションことはじめ
2014（H26）年度	橘公民館	武雄市	たちばな防災講座
2015（H27）年度	南多久公民館	多久市	南多久地域防災力アップ講座
2016（H28）年度	成和公民館	唐津市	唐ワンGO!で成和でGO!成和の防災!あそぼ~さい!
2016（H28）年度	東脊振公民館	吉野ヶ里町	「防災」話していますか？もしもの時のこと
2018（H30）年度	古枝公民館	鹿島市	ふるえだ防災プロジェクト

P15へ 事例 03

CATEGORY 06

子ども・学校連携

子どもの存在を意識することで、地域の未来の芽がふくらむ。

子どもも地域社会の一員

公民館やセンターの中には、小学校と隣り合わせのところがあります。上手く連携して事業をしているところもありますがまだまだ少数で、学校と何か一緒にすることはハードルが高いようです。課題解決支援講座では、小学校の総合学習の時間を活用して一緒にできることを考えてみました。公民館はどんなところかを知ってもらうことと、地域学習を結びつけ（能古見）、地域の魅力や課題、未来を考え、地域の人の考えを子どもの視点で調査（大良）をしました。子どもも地域社会の一員であることを住民にも認識してもらう機会となります。

地域課題に子どもの視点や存在を活かす

地域課題には、子どもの視点や存在を大切にしたプログラムづくりも必要です。子どもにとっても、自分が住んでいる地域のことを考える機会となります。家族以外の人と知り合ったり、地域の未来像をイメージすることで、自然と郷土愛も育まれていきます。地域にとっても、講座開催によって住民ニーズや地域の活性化への刺激になったという新鮮な驚きがあります。親子参加のイベント（有田、鳥栖）、子育ての課題解決のきっかけ（桜岡、大成）、ワークショップで考えや気づきを人前で発表する（東唐津、成和、大良）など、やり方の工夫次第では地域課題が地域の強みに変わります。

相乗効果を生みだすプログラムを工夫

大人は子どもの存在を意識することで未来を展望しやすくなります。さらに、大人が子どものために「なんとかしなければ」というモチベーションも湧きやすいです。そして、子どもの視点を通して地域の未来を考えるという相乗効果も生みだされます。しかし、働いている子育て世代に講座へ参加してもらうには大変苦労がいります。だからこそプログラムを工夫する必要があります。それは環境を整えるということも含めて、親と子が一緒に楽しめるものや親と子が別メニューになっているものなど、多様に考えられます。

地域の未来が芽吹く

相乗効果で生まれた大人のモチベーションは、子どもと大人の未来を作る地域づくりに結びついていきます。大人同士の関係では生まれない効果が大人と子どもとの関係で生まれ、より未来へのイメージが湧きやすくなります。子どもの未来を考えるということは、地域の未来を考えることなのです。大人が地域の未来に対しモチベーションを生み出していくのは、子どもを育てるようなものです。それを地域への芽吹きを促す行動につなげていきましょう。そして芽が出たら、みんなで水を撒くことも大事です。地域の課題に子育て世代が参加するということは、子どものことを地域全体で共有化する機会にもつながります。

ここがポイント

❶ 学校や子ども団体等との協働も視野に入れる。

❷ 地域課題には子どもの視点や存在も大切。

❸ 子育て世代の参加を促す工夫が必要。

❹ 地域の芽をみんなで育てていく。

子ども・学校連携を実行したところ

年度	公民館等名	市町名	テーマ	
2016（H28）年度	成和公民館	唐津市	唐ワンGO!で成和でGO!成和の防災!あそぼ~さい!	
2017（H29）年度	東唐津公民館	唐津市	東唐津あかりプロジェクト	
2017（H29）年度	桜岡支館	小城市	地域で子育て 伝えないと伝わらない	P21へ 事例 06
2018（H30）年度	大成公民館	唐津市	ようこそ 大志のお父さん!あなたの知らない世界へ	
2018（H30）年度	有田町公民館	有田町	遊びの楽校（がっこう） inありた	P23へ 事例 07
2019（R元）年度	鳥栖まちづくり推進センター	鳥栖市	みんなでつくる「とすまちもちまつり」	P27へ 事例 09
2019（R元）年度	能古見公民館	鹿島市	のごみ★お宝再発見プロジェクト	P25へ 事例 08
2020（R2）年度	大良公民館	唐津市	大良しあわせプロジェクト	P29へ 事例 10